G.W.F.Hegel／Vorlesungen über die Philosophie der Religion

Herausgegeben von Walter Jaeschke

ヘーゲル

宗教哲学講義

山崎　純 訳

創文社刊

ヘーゲル

宗教哲学講義

山崎　純訳

創文社

山崎　純（やまざき・じゅん　松田純）
1950年新潟県に生まれる．1972年静岡大学卒業．1979年東北大学大学院文学研究科博士課程修了．文学博士．1995年より静岡大学人文学部教授．
1990-91年，テュービンゲン大学哲学部，2001年ボン大学「科学と倫理のための研究所」(IWE)，「生命科学における倫理のためのドイツ資料センター」(DRZE) 客員研究員．
〔主要著作〕『神と国家―ヘーゲル宗教哲学』(1995)，『人間学―その歴史と射程』（金子晴勇編，共著，1995)，『ヘーゲル哲学への新視角』（加藤尚武編，共著，以上創文社，1999)，『共生のリテラシー―環境の哲学と倫理』（加藤尚武編，共著，東北大学出版会，2001）など．

〔ヘーゲル　宗教哲学講義〕

二〇〇一年一一月二五日　第一刷印刷
二〇〇一年一一月三〇日　第一刷発行

訳者　山崎　純
発行者　久保井浩俊
印刷者　三甲野隆優

発行所　株式会社　創文社
〒一〇一-〇〇二三
東京都千代田区麹町二-六-七
電話　〇三-三二六三-七一〇一
振替　〇〇一二〇-〇九二四七二

訳者との申し合せにより検印省略

暁印刷・鈴木製本

ISBN4-423-17134-1　Printed in Japan

凡　例

一　本書の底本はヘーゲルの「宗教哲学」講義の新版 G. W. F. Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Religion*, Hrsg. v. Walter Jaeschke, Hamburg 1983-85. である。欄外の数字はこのテクストの頁数を示す。

二　同じ欄外の例えば5/8という数字は、ベルナーという聴講生が自分の速記録の欄外に書き込んだ日付であり、この場合であれば、「一八二七年五月八日」を意味する。すべての日付が漏れなく入っているわけではないが、講義がどのようなペースで進んだかを知る上で貴重な情報である。ちなみにこの学期の講義は三月七日に開講し、月、火、木、金の週四回、十七時から十八時の一時間ずつ行われ、八月十日に終了している。聴講生数はベルリン大学の記録によれば、一一九名であった。

三　各部各章各節の冒頭に掲げた飾り罫にはさまれた部分は訳者による要約である。この先の展開をこれでイメージして読み進んで頂ければ、講義の流れをたどりやすいと思う。また、この要約部分だけをつなげて読めば、「宗教哲学」講義のダイジェスト版になるはずである。

四　章節の区分と各章各節の見出しは原文通りではない。もともと講義の筆記者たちが講義の流れをふまえて、それぞれの仕方で章節に区分している。それを編者イェシュケが統一化した。本書では、原文をふまえながらも、さらに細かい見出しをつけている英語版（G. W. F. Hegel, *Lectures on the Philosophy of Religion*, Ed. by P. C. Hodgson, vol. 1-3, Berkeley 1984-87.— LPR と略記）の章節区分におおむね従った。

五　訳文中の（　）は、原文中の（　）および訳語の言い換えや挿入句を表す。いずれにしても原文に属する内容である。

六　〔　〕は訳者による補足および本文中に挿入した短い注である。

七　長めの注は†印をつけて各段落のうしろに配置した。

八　［　］は、本文の一部言い換えや追加を示す異稿を、本文の通読を妨げないかぎりで　本文中に挿入したものである。末尾に、異稿の由来をVa→Wのように、記号で示した。その意味については十を参照。

九　本文と切り離した異稿は＊印を付けて各段落のうしろに配置した。……。［＊］……となっている場合は、本文にはなく異稿にのみ見られる記述である。＊↓……↑＊となっている場合は、矢印にはさまれた部分が異稿では別の表現に置き換えられていることを意味している。

十　異稿の由来を示す記号の意味は次の通りである。

L（ラッソン版）Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Religion*. Hrsg. von G. Lasson. Bd. 1-2. Hamburg 1925-28.

W¹　初版（マールハイネケ版）Hegel, Werke. Bd.11-12. *Vorlesungen über die Philosophie der Religion*. Hrsg. von P. Marheineke. Berlin 1832.

W²　第二版（バウアー版）Hegel, Werke. Bd.11-12, *Vorlesungen über die Philosophie der Religion*. Hrsg. von P. Marheineke. 2.Auflage. Berlin 1840. (Nachdruck Stuttgart 1928)

WはW¹とW²の両方を指す。

異稿のほとんどはこの三つの旧版のなかに編入されていたものである。それがどこから編入されたものと推測できるかを、次の記号で↓の上に示した。

An　現存する筆記者不明（Anonymus）の筆記録。詳しくは山﨑純『神と国家　ヘーゲル宗教哲学』創文社、二五三頁参照。

Bo　イグナシー・ベルナー（Boerner）の筆記録。詳しくは『神と国家』同頁参照。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Co　バウアーが第二版（W^2）の編集に用いたのちに散逸したヘーゲル自筆草稿の束（Convolut）。詳しくは『神と国家』二四〇―四一頁参照。

Hu　ヨーゼフ・フーベ（Hube）の筆記録。詳しくは『神と国家』二五三頁参照。

Va　新版編者が利用できた筆記録以外に旧版の編集に用いられた筆記録（Wの場合はマイヤーによるものとドロイゼンによるもの、Lの場合は筆記者不明のものとエールトマンによるもの）から旧版に編入された異稿（Varianten）。現存する資料では必ずしも情報源を確定できないものについてはCo？　Va？　などで、また一八二七年の内容かを確定できないものについては（1827?）と表記している。

異稿の出典を推定する根拠を理解するには、新版テクストの成り立ちを知らなければならない。これについてはドイツ語版の編者序文（V.3.IX-LXXXVI）および『神と国家』補論一参照。

十一　ヘーゲル関係の他の文献は次の略号のあとに巻数と頁数のみで指示した。

GW.（大全集版）G.W.F. Hegel, Gesammelte Werke. Hamburg.

Sk.（ズールカンプ版著作集）G.W.F. Hegel Werke in 20 Bänden Hrsg. von E. Moldenhauer u. K. M. Michel. Suhrkamp.

V.（講義録選集）Hegel, Vorlesungen. Ausgewählte Manuskripte und Nachschriften.

邦訳は次の訳書の頁数である。ただし、訳文は必ずしも一致しない。

『哲学史講義』上、中、下巻、長谷川宏訳、河出書房新社、一九九二―九三年

『歴史哲学講義』上、下巻、長谷川宏訳、岩波文庫、一九九四年

『大論理学〔初版〕』1、2、3巻、寺沢恒信訳、以文社、一九七七―九九年

『大論理学〔第二版〕』上巻の一、二、中、下巻、武市健人訳、岩波書店、一九五六―六〇年

『小論理学』上、下巻、松村一人訳、岩波文庫、一九七〇年
『精神哲学』上、下巻、船山信一訳、岩波文庫、一九六五年
『信仰と知』上妻精訳、岩波書店、一九九三年
『ヘーゲル批評集』、『同II』海老澤善一訳編、梓出版社、一九九二、二〇〇〇年

日本語版への編者序文

一　宗教をめぐる論争

ヘーゲルは一八二一年に初めて、ベルリン大学で「宗教哲学」を開講し、その後あらたに一八二四、二七、三一年とくりかえし開講した。宗教哲学は、当時はまだ哲学的な諸学の模範体系のなかの既成の学科ではなかった。啓蒙主義の末期にこの模範体系の組みかえがなされたときに、哲学に対して、芸術哲学、歴史哲学、哲学史の専門教育と並んで、やっと宗教への問いが提起された。だが宗教哲学は不利な状況のなかで成立した。十八世紀形而上学の「哲学的神学」に対する批判によって、神を認識する可能性が疑わしくなり、それとともに宗教にかかわる現実もまた疑わしいものになったからである。カントは倫理学をとおって神についての思想を獲得するという試みに初め大きな期待をいだかせたが、この試みもまもなく失敗であることが明らかとなった。「汎神論論争」（一七八五年）、「無神論論争」（一七九八年）、「神の事柄をめぐる論争」または「理神論論争」（一八一一年）という三大論争のなかで、神について思考する正しい様式をめぐって激しい論争がなされた。この時代のほとんどすべての著名な思想家は、このうち少なくとも一つの論争に、場合によっては、さらに別の論争にも加わった。これと並行して神学の内部でも、後世に多大な影響をおよぼすような展開がみられた。聖書解釈への史料批判的方法の導入と、それにつづく神話概念の導入である。これらはまず旧約聖書に適用されたが、すぐに新約聖書にも適用されるようになった。

二　「宗教哲学」を知らずしてヘーゲル哲学を理解することはできない

ヘーゲルの「宗教哲学」はこのような論争を背景として登場した。けれども彼は論争する党派の一方の側に立ったのではなく、宗教についての新しい理解を深めた。その新しい理解とは、宗教は精神が自己自身についての意識を獲得しようと試みる一つの形式であるというものだった。この場合の「精神」とは、神話的な姿をしたものではなく、精神的な実在としてのわれわれ人間自身の本質を綜括した概念である。精神は宗教あるいは神観念のなかで、精神にとって何が真理であるかを表明するが、それによってしかし、精神が自分自身についていだく意識をも表明する。精神の自己意識のこのような形式として、宗教は芸術と哲学に並び立つ。こうした自己意識のこれら〔芸術・宗教・哲学〕以外の諸形式は、これまでの精神生活のなかに現れてはいない。芸術よりは、宗教の方が精神の自己意識のいっそうふさわしい形式である。芸術によって神的なものを表現する際に避けがたくつきまとう自然的な諸要素が、宗教では克服されているからだ。反面、同じ理由から、宗教は哲学のレヴェルに達していないとヘーゲルは考える。みずからを概念で把握する精神にとって外的な諸契機、例えば時間的・空間的なしばりを哲学が克服しているというまさにその点において、哲学は宗教を超え出ているからだ。それゆえ宗教哲学は、芸術哲学と哲学史とともに、ヘーゲルの体系をその頂点において完結させるものである。だから、宗教哲学を知ることなくしてヘーゲル哲学の十全な認識は不可能である。ヘーゲル哲学の影響史もまた宗教哲学をぬきには理解できない。

三　両刃の剣——宗教擁護と宗教批判

ヘーゲルの宗教解釈は宗教を後期啓蒙主義の純然たる道徳的な宗教概念の狭さから解放した。その狭さとは、宗教は倫理的な義務を神的な掟と理解することであって、それを一歩も超え出るものではない、とする狭さであった。こうした理解は、宗教のなかで道徳的なものを超え出るような要素のすべてを取り除くことにつながる。しかもそのような要

素はけっして少ない部分ではなかった。これに対してヘーゲルは宗教に、精神生活における、最高の場ではないけれども、中心的な場を割り当てた。ヘーゲルの宗教解釈は宗教擁護と宗教批判を同時に遂行するものである。このような両面性は、ヘーゲルの宗教概念との対決の歴史のなかで、宗教批判的な要素を取り除くか、宗教擁護的な要素を取り除くかの択一的な試みへと繰り返し導き、ヘーゲル宗教哲学を伝統的な啓示信仰へと立ち返らせたり、ないしは十九世紀のその後の急進的な宗教批判へと方向づけたりした。だがまさしくこの両刃の剣にこそ、ヘーゲルの発想の特徴と実り豊かさがあるのだ。

四　包括的な比較宗教学をめざす先駆的な試み

宗教についてのヘーゲルの精神哲学的な解釈は、さらにほかの点でも注目すべき創造的な豊かさをもたらした。宗教が論じられる場合、それまでは〈異教→ユダヤ教→キリスト教〉という連続か、〈ユダヤ教・イスラーム・キリスト教〉という並立といった図式であつかわれてきた。ヘーゲルの宗教解釈は、古代や中世にまでさかのぼるこの二つの図式から、初めて宗教についての考察を解放した。この二つの図式は宗教を哲学的かつ歴史的に理解するのに貢献したというよりは、むしろ護教的な目的に貢献してきた。つまり自分たちの宗教〔キリスト教〕を真の宗教として保証し、他の諸宗教を間違った宗教なのだと解明し、あるいはペテン的な宗教であるとさえ暴露するのに役立ってきた。ヘーゲルにとっても、キリスト教は「完全な」宗教にあたる。けれどもその根拠は、キリスト教のみが真の神からの啓示を受けているからなのではなく、キリスト教の神観念のなかに精神の自己意識という、宗教の概念を余すところなく構成するものが主題化されているからなのだ。ヘーゲルにとって、あらゆる宗教がこの自己意識のさまざまな形態なのだということも、これに劣らず強調しておかなければならない。そのかぎりで「間違った」宗教というものはない。ただ、精神がまだ自身についてのふさわしい自己意識を得るにいたっていない、そのような諸宗教だけがありうるのだ。ヘーゲ

ルはさまざまな宗教の全体が精神の自己知のそのような諸形態であることを明らかにしようと試みるなかで、初めて西洋（ユダヤ教とキリスト教から影響を受けながら西洋に政治的な脅威として圧力をかけているイスラームも含めた西洋）の宗教的な伝統を超えて、東洋の諸宗教にまで考察をおよぼした。その際、当時入手可能な宣教師や旅行家たちの報告書や最初の翻訳書、とりわけインドの諸宗教の聖典翻訳などに依拠した。もちろん今日のレヴェルで見れば、東洋の諸宗教についてのヘーゲルの理解は不十分だった、と批判するのは簡単だ。けれども、そう批判する以上に重要なことは、比較宗教学が専門分野として構築される以前に、ヘーゲルがこうした試みに敢えて挑戦し、学期を重ねるごとに理解を深めていったということである。その挑戦は、精神的な本質があるところならどこでも、その精神性は自分自身についての知に達しようと努めるものだ、ということを示そうとした。しかもその自己知への到達は、こうした自己意識の他の諸形態である芸術と哲学と一体となって、さらにそれを超えて、精神生活の他の諸形態である法と政治とも一体となって展開するものだ、ということを示そうとした。これに匹敵するほど包括的な着想というものを宗教哲学は今日にいたるまで知らない。

五　この翻訳書の意義

それゆえ私の敬愛する研究仲間である山崎純教授がこの領域に関する彼のこれまでの研究をふまえて、このたびヘーゲルの宗教哲学講義を日本語に翻訳するという多大な労を引き受けてくれたことは、私にとって大きな喜びである。氏はその際、宗教哲学の四つの学期の資料すべてを含むドイツ語新版のなかから、適切にも一八二七年の講義を選んだ。この学期の講義はヘーゲルが初めて宗教哲学を体系的な形式で講じきることに成功したという点で際立っているからだ。その体系的形式は先行する年度においても初めからヘーゲルの念頭に浮かんでいたものではあったけれども、それをまだ十分に具体化するに至らなかった。思想的な成熟度という点では、ヘーゲルが一八三一年に死ぬ前に行った最後の学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

期の講義もきっと優れていたであろう。ところがこの学期については〔本書に収録されているシュトラウスによる要約と、旧版のなかにまぎれこんでいるばらばらな記録以外に〕十分な資料がない。そこでわれわれがヘーゲルの宗教哲学を知ろうとすると、とりわけ一八二七年の講義を参照せざるをえない。ここに刊行された日本語版はヘーゲル体系のこの重要分野を日本の読者に開示するとともに、ヘーゲル哲学全体の理解をも促進してくれるものと確信している。

一九九九年新春

ベルリンとボーフムにおいて

ヴァルター・イェシュケ

（ヘーゲル研究所長）

訳者まえがき

本訳書のテクストの意義

本書はヘーゲルがベルリン大学でおこなった「宗教哲学」講義の新版（一九八三―八五年刊　G.W.F.Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Religion*, Hrsg. v. Walter Jaeschke, Hamburg.）の翻訳である。これまで『宗教哲学講義』として最もよく読まれてきたテクストはブルーノ・バウアーが編集した第二版（一八四〇年）である。これがグロックナー版、ズールカンプ版に引き継がれ、邦訳『宗教哲学』（木場深定訳、岩波書店「ヘーゲル全集」一五―一七巻、一九八二―八四年）の底本ともなっている。これ以外に、マールハイネケが編集した初版（一八三二年）、ラッソン版（一九二五―二九年）がある。これらはいずれも、いくつかの異なる学期の講義記録をハサミで切ってノリでつなげる形で一書に合成したものである。ヘーゲルは一八二一、二四、二七、三一年の四つの夏学期に「宗教哲学」を講義したが、この十年間にヘーゲルの宗教思想はじつは大きく変化した。従来の諸版はこの事実を覆い隠し、ヘーゲルの宗教哲学が最初から完成していたかのような先入見を与えてきた。とくにマールハイネケとバウアーは異なる年度の講義録の異なる文脈のなかにある文章同士をつなげる際、うまくいかない時には、つなぎの文章を挿入したり、都合の悪い箇所を削除するなどの改竄までやっている。一例として、ユダヤ教についての叙述を見てみよう。第二部の宗教史の叙述は講義全体のなかでも最も変化が激しい部分であるが、なかでもユダヤ教の位置づけは年度ごとに猫の目のように変化した。一八二四年には、ユダヤの「崇高の宗教」の限界を超える形で、ギリシャの「美の宗教」が登場する。ところが二七年には、ユダヤ教はギリシャ宗教よりも高次の宗教として評価されて、「美の宗教」より上位に置かれている。

バウアー版はこの箇所を基本的には二四年の編成に従ってユダヤ教→ギリシャ宗教の順で編集しながら、他の年度の講義録も組み込んでいる。そのため、ギリシャ宗教→ユダヤ教という逆の順序で講義された二七年の内容を組み込むとき、「美の宗教から崇高の宗教へと高まる必然性」（本書二六三頁一〇―一一行）という箇所から「美の宗教から」という語を削除して、何からの「崇高の宗教への超出」（前掲木場訳中巻二八〇頁八行）なのかをぼかさざるをえなかった。これは恣意的な編集のほころびを取り繕うこと以外の何ものでもない。そもそもこうした編集的な操作によって、ギリシャ宗教をユダヤ教よりも高く評価する思想と、ユダヤ教をギリシャ宗教よりも高く評価する思想とが同一のテクストに混在している。これでは思考の首尾一貫した歩みをたどることは無理である。この一例からも旧版の編集方針の破綻は明らかであろう。ヘーゲルの晩年の思想が図式的で強引な独断という印象を与えてきたのは、この種の操作が他の『講義』テクストでもしばしば行われているところにも起因している。

本書の底本の編者イェシュケはこのように問題の多いこれまでの編集方針を捨てて、各年度ごとの講義の姿を再現するよう試みた。これによって読者は、初めて本来の思考の流れにそって「宗教哲学」講義を読むことが可能となった。同時に、学期を追うごとに変化していく思想的発展をたどれるようにもなった。後者のためには新版テクスト全体を訳出すべきであろう。しかしこれはあまりにも膨大であるため、本書ではまず一八二七年度の講義録を訳出した。なぜ二七年か？　については「日本語版への編者序文」末尾（xii―xiii頁）に適切な説明があるので、それをお読み頂きたい。

一八三一年講義の要約について

さらに、ダーフィット・シュトラウス（D. F. Strauss, 1808-74）が要約した最終学期（一八三一年）の講義を訳出した。シュトラウスは一八三一年十一月十日にはじめてテュービンゲンからベルリンのヘーゲルのもとを訪問したが、

その四日後にヘーゲルは急逝した。講義を直接聴く機会を永遠に失ったシュトラウスは、なお半年間ベルリンに留まって、聴講生から多くのノートを借り集めて、論理学、哲学史、世界史の哲学、宗教哲学などの講義の抜粋を作った。このテキストも、もっと詳細な講義録から重要な部分を抜粋して作った要約である。講義の全体をカヴァーしているが、きわめて簡潔なまとめになっている。ヘーゲルはこの年の夏学期に「宗教哲学」を講義し、同年冬学期の開講直後にコレラで仆れたのだから、完結した講義としては、シュトラウスによる要約は、ヘーゲルの宗教思想の文字通り最終的な到達点を伝える今のところ唯一の資料である。しかもここには、人生の最後に遭遇した重大政治事件、フランス七月革命とイギリス選挙法改正の衝撃すら映し出されている。第一部の「D　国家に対する宗教の関係」（四〇八―一〇頁）は、この衝撃を受けて新たに設けられた章である。この詳細がバウアー版に収録されている（Sk. 16. 236-46. 木場訳、上巻末尾）。以前の学期にはなかった章であるため、この学期の記録だけで編集されていると考えられる。これは本来三一年の章別編成のなかで読まれるべきものであるため、内容の重要性を顧慮して、あえてシュトラウスの要約のなかに付録として挿入した（四一一―二〇頁）。

この要約はヘーゲル学派の分裂を誘発した『イエスの生涯』（一八三五年）の作者の筆によるものであるから、その作者がヘーゲル「宗教哲学」から何を学びとったかを直接示す資料としても貴重であろう。

なお、三一年の講義録はすべて失われたが、旧版の編集に用いられたため、旧版のなかから、これに該当する部分をある程度同定できる。新版はこれを可能なかぎり拾い集めて、関連する他の年度の講義録の脚注につけている。訳者は当初これらをもとに三一年の講義をできるだけ再構成してみようと試みたが、のこされた資料だけでは必ずしも形のよいものができないことと、本書がさらに膨れ上がることを恐れて断念した。将来、新たに資料が発見されたりすれば、それが可能となるかもしれない。代わりにバウアー版についてのみ、だいたいの対応箇所を木場訳のページ数と行数で注記した。ただしバウアー版にはあるがシュトラウスの要約のなかで省略されている場合には、対応箇所をうまく示す

ことができなかった。

異稿のあつかいについて

［　］内や＊印は異稿である。新版テクストには多くの異稿がついている。旧版のなかに編入されている記述と、別の筆記録にあってテクストが本文に採用しなかった表現、の二つに大別される。もしこれらすべてを訳出すれば、膨大な量になる。本書をスリム化するために取捨選択し、本文にはない内容を含む記述を中心に訳出した。表現は異なるが、本文の内容を出ないものは、筆記者の言葉遣いの違いであったりする場合が多く、いちいち訳出するとかえって煩わしくなるため割愛した場合がある。一八二七年講義のもの、あるいはそう思われるものに限定し、三一年のものは一部を除いて割愛した。本文を通読する際、わずらわしいと感じられる読者は、［　］や＊をいっさい無視して頂いても、本文の理解には支障がない。

注について

注は基本的には原書の編者注に基づいている。本文の通読を妨げない程度のごく短い注は〔　〕内に入れて本文中に挿入した。長めの注は†印をつけて、各段落のあとに置いた。編者注の多くはヘーゲルの講義内容の情報源や批判の対象を教えている。それは驚嘆するほど徹底した調査にもとづいている。ヘーゲルの蔵書目録などを手がかりに、ヘーゲルが出典をあげていないものも調べ上げ、用いられている版まで確定していることが多い。これらのうち、邦訳のあるものは可能なかぎり、邦訳のページ数を掲げた。ただしプラトンやカントの著作、ギリシャ悲劇など数種の邦訳があり、原書の節番号等で容易に該当箇所を見つけることのできるものについては、邦訳ページ数を省略した。また邦訳がなく原書も入手困難なものについては、ページ数を掲げても一部の研究者をのぞいて意味がないと考え、省略した。これら

を詳しく研究されようとする方はドイツ語版の詳細な編者注に当たって頂きたい。

とくに第二部の異文化宗教にかかわる編者注では、中国やインド、チベット、ペルシア等々の宗教や文化についての情報源が確定され、講義の叙述に対応する箇所が原文（英語、フランス語、ドイツ語など）でしばしば長く引用されている。これらをすべて翻訳紹介すれば、それだけで膨大なものとなる。本訳書では、ヘーゲルがどのような情報にもとづいて異文化の宗教について語ったのかが一目でわかるように、使用されたテクスト書名を日本語で示すにとどめた。ヘーゲルが参照しながら講義内容がそれとずれている場合などには、特に注記した。どのような文献が参照されたかは当時ヨーロッパにもたらされた異文化情報を知るうえでも貴重である。これらのほとんどは邦訳がなく、テクストそのものも入手困難なものが多い。詳しい書誌的情報を知りたい方はやはり原書の詳細な編者注を参照して頂きたい。

訳語・訳文について

訳文はできるだけ平易であるよう心がけた。わが国の翻訳には、原文の名詞形をそのまま「AのBのC」と置き換えるだけの訳文も少なくない。しかしこれだと、翻訳だけではほとんど意味が理解できなくなる場合が多い。本訳書では、原文の名詞形をできるだけ動詞的に訳して、目的格か所有格かなどがはっきりわかり日本語としてもスムーズに読み通せるように配慮した。

一つの原語を一つの訳語で訳しとおすことは考えず、文脈に応じて適宜に訳しわけた。これまで「業界用語」として通用してきた訳語でも、一般読者にはわかりにくいものは採用しなかった。例えば、Verstand は「悟性」と訳されるのが通例であるが、ここでは「固定的な知」、「分析的な知性」などと訳した。ヘーゲルはこれを、動的で総合的な弁証法的な知に対して、啓蒙主義的な分析的な知を批判的に指す場合が多いからである。とくに批判的な意味合いがない場合には「分別」または「知性」とした。Sittlichkeit は「人倫」という訳語でヘーゲル研究者のあいだでは広く普及

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com